[特別寄稿]

災害を仲立ちとして、世界に開かれる

赤坂 憲雄

たとえば、巨大な災害に襲われたとき、ほんのつかの間であれ、隠されていた現実が社会の表層にむきだしに顕われることは、とりたてて珍しいことではない。しかも、この高度に情報化が進んだ時代には、災害もまた、世界に向けてむきだしに晒されていることを忘れてはならない。

東日本大震災に際して、日本人はなぜ、震災後の苛酷な状況のなかでも、静かに耐えて、救援の訪れを待つことができたのか。なぜ、被災地は暴動や略奪のちまたと化すことがなかったのか。3.11から遠からぬ時期であったが、海外メディアは驚きとともにそこに関心を寄せ、大きく報道もした。この静かに耐え忍ぶ日本人の姿は、たんなる国民性である以上に、関東大震災や戦争の時代をくぐり抜けた末の「民度」の成熟ではなかったかと、わたしは想像している。しかし同時に、復興が遅々として進まぬ状況のなかで、不満や批判がけっして大きな声にならない現実にたいしても、海外メディアは関心をそそられているようだ。耐える日本人／物言わぬ日本人が表裏をなして発見されたのかもしれない。

東日本大震災が起こって1年あまりが過ぎたころ、わたしは国際交流基金の誘いにしたがって、北京と天津を訪ねた。「震災と東北、そして文化」と題して、講演を行なうためである。中国の人々の反応は、実に率直なものであった。震災のもたらした甚大な被害状況については、ほとんど関心を示さなかった。四川大地震から数年しか経っていない。そこでは20万人を超える犠牲者が出たといわれていた。悲惨ならばよく知っている、といったところか。東日本大震災についても、かれらはメディアを通して十分に情報は得ている。そこで、わたしはあえて、被災地の将来像を語ることにした。どのように震災からの復興を果たそうとしているのか。30年後、50年後の日本社会を思い描きながら、いま、なすべきことは何か。聴衆はしっかり喰いついてきた。

たとえば、日本で復興が遅れていることはよく知られていた。四川大地震に際して、中国政府が迅速に動いて復興を押し進めたことを念頭に置いて、わたしが「民主主義は時間がかかるものです」と語ると、会場のあちこちから笑いが起こった。その笑いは不快なものではなかった。少なくとも知識層のまなざしは十分に成熟している。巨大な災害にたいしていかに立ち向かうか、いかなる復興のシナリオを描くことができるか。政治体制の違いが、そこに大きな影を落としているという認識が共有された瞬間ではなかったか。

あるいは、この震災がフィルムの早回しのように、数十年後にゆるやかに辿り着くはずであった「超高齢化社会」をいま・ここに手繰り寄せてしまった、そう、わたしは語った。すると、中国の聴衆は思いがけず、鋭く反応したのである。こちらは逆に、中国が来たるべき高齢化社会の到来にそなえて、日本社会が行なおうとしている「実験」の行く末に眼を凝らしていることに気付かされた。このとき、はじめて東日本大震災がかれらの身近なテーマとなったのかもしれない。

＊　　＊

災害を仲立ちとして、異文化が思いがけぬ形で繋がれる。災害がなければ、おそらく互いにその存在すら知ることがなかった異文化に触れる機会が、カオス的な状況ゆえに提供される。それはとてもいいことだ。そもそも文化や芸術には、国家・民族・宗教などが張り巡らす壁や境界を越えて、新しい関係性や出会いの場を創りだす可能性がはらまれている。災害がもたらす哀悼と共感のやわらかなネットワークのなかでは、それはさらに大きな、見えない壁や境界を踏み越えてゆく力を手に入れることになる。文化や芸術は生臭い現実のしがらみや利権といったものから、一定の距離を保っているからだ。

たとえば、宮城県の牡蠣を使った郷土料理をフランスやドイツで紹介するプロジェクトが行なわれた。かつて、1960年代に、フランスで牡蠣養殖が病気のために壊滅しかけていたとき、その危機を救ったのは宮城から送られた種牡蠣だった、という。交流の歴史はすでに長い。今回は、フランス側から返礼のプロジェクトが行なわれている。とはいえ、牡蠣をめぐる食文化は日本とフランスでは異なっている。ドイツでは牡蠣を食べる習慣そのものが見られない。食文化のグローバル化が、ファーストフードとは異なる方向に向けてデザインされてゆく可能性が示唆されているのではないか。歴史の古い国々にだけ可能な道筋は、確実に存在する。

あるいは、東北の代表的な民俗芸能である「鹿踊り」がアメリカなどで公演されたことは、とても興味深いことである。なぜなら、この民俗芸能は死者への鎮魂と供養のために演じられてきたものであるからだ。東日本大震災における2万人の犠牲者たちに向けての鎮魂から、復興と再生へと繋がる、深い感謝と祈りが託されることになった。南三陸町水戸辺の「鹿子躍」にまつわる供養塔には、生きとし生けるものすべての命の供養のために奉納する、という言葉が刻まれている。鳥獣虫魚をも巻き込んだ生命の連鎖へのまなざし。震災の夏、被災地のいたるところで、鹿踊りや剣舞などの民俗芸能が復興を遂げたことに、わたしは衝撃を受けた。あの夏から秋にかけて、被災地のそこかしこに宗教的なるものが露出していたことを忘れるわけにはいかない。われわれは宗教を持たない民族ではない。

さらに、これはわたし自身も関わったプロジェクトであるが、会津の喜多方市にノルウェーとイギリスから訪れた3人の女性アーティストが滞在して、作品制作を行なった。なかなか興味深いものだった。市内の古い蔵で開催された、「精神の＜北＞へ」というタイトルの展覧会を訪れ、それぞれに「北」を背負った作家たちと言葉を交わすことができた。ヨーロッパの「北」としてのノルウェーやスコットランドと、日本の「北」を抱いた東北とが出会うことによって、何かが確実に生まれていた。「北」にはおそらく、異なる民族や宗教との衝突や交流の歴史が豊かに埋もれており、それが芸術文化のうえにも影を射しかけているのではないか。

最後に、「東北──風土・人・くらし」と題された写真展について触れておく。飯沢耕太郎氏の監修のもと、東北にゆかりの深い、世代も表現手法も異なる10組の写真家たちの作品を百数十点選んで展示するプロジェクトである。5年間にわたって、世界の約50都市を巡回する予定であるという。実は、この写真展を東北の会津と遠野で開催する計画が進められており、わたし自身も関わっている。写真という表現媒体の持つ力はおそらく、被災地という抽象を超えて、そこに息づいていた風土や人々の生きる具体的な姿を、海の向こうに暮らす人々に伝えてくれるはずだ。それは同時に、東北の人々にこそ投げ返される必要があるとも感じてきた。他者による理解を深めるとともに、東北自身が自己認識を深めるためにも、この写真展は大切な場となるにちがいない。

いずれであれ、災害もまたグローバルに共有される時代となったのである。われわれは東日本大震災という巨大な悲惨を体験した。そこで学んだこと、学びつつあることは、数限りもなく存在する。この震災の記憶を内向きに抱え込んではならない。それは前向きに、世界の人々とともに共有されねばならない。災害列島に生かされてあるわれわれ日本人が、まさに、この災害というテーマをめぐって世界に貢献する道を探ることは、いよいよ重要なものとなってゆくことだろう。

赤坂憲雄　あかさか・のりお

民俗学者。学習院大学教授。福島県立博物館館長。
「東北学」の提唱者として知られる。東北芸術工科大学教授在任時の1999年、同学内に東北文化研究センターを設立。99年雑誌『東北学』を創刊。『3.11から考える「この国のかたち」　東北学を再建する』（新潮社 2012年）等、東北に関する著作多数。2011年4月より東日本大震災復興構想会議委員。12年3月、国際交流基金の事業の一環で中国・北京、天津で講演会を行った。

撮影：相川健一